

『八犬伝』と「二十村の闘牛」

五十嵐 貞治

序章

『八犬伝』第七輯に、八犬士の一人犬田小文吾悌順が活躍する越後の場面がある。それは、八犬士の一人犬田小文吾が、他の犬士達を探し求めて越後国小千谷にたどり着き、そこで世話になった宿の主人石亀屋地団太の誘いで、闘牛を見物に行き、その最中に暴れ出した猛牛を見事にねじ伏せるといふ場面である。それ以前の第七輯巻之五冒頭には「八犬伝第七輯巻之五に附記す闘牛考并に小狗の略説」として、闘牛に関する考証が記され、同時に見開き一頁分の闘牛の様子を細かに描いた挿絵が用いられている。この「二十村の闘牛」は虚構ではなく、実際に行われてた行事である。そして、今でも新潟県古志郡では春から夏にかけて各村ごとに闘牛が行われている。しかし、馬琴はこの「二十村の闘牛」を実際に見たという事実はなく、越後の文人鈴木牧之から送られてきた資料を元に『八犬伝』の中

に使用したのである。

鈴木牧之は、『北越雪譜』の著者である。『北越雪譜』が出版されるまでには山東京伝、京山ら、数人の手を経て、最終的に山東京山によって出版された。馬琴も牧之から雪譜出版を依頼を受け、その時期に書簡のやり取りなどを通して、今まで取材した越後に関する資料を馬琴に書き送っていた。その資料の一つに「二十村の闘牛」が含まれていたのである。

馬琴は「二十村の闘牛」が鈴木牧之から送られてきたことについて『八犬伝』第七輯巻之七第七十三回の終わりに次のように書き記している。

曲亭主人曰、這個の闘牛の光景は、越後魚沼郡、塩沢の里長鈴木牧之が、庚辰の春三月廿五日、彼地に到りて目撃したる函説に由れり。抑闘牛の一奇事は、越後雪譜中に載べきものなれども、毎歳筆研繁多にして、

いまだ創するに違あらず。且老歩旅行を致ふの故に、
いまだ彼州に遊ざれば、なほ事足らで歳月を歴たり。
この故に、牧之の企望を空くせじとて、言のこゝに及
べるなり。写真の図は、巻の五の簡端に見えたり。
(以下、『八犬伝』の本文は、岩波文庫版『南総里見
八犬伝』によった。)

馬琴はもともと鈴木牧之が『北越雪譜』出版のために送つた「二十村の闘牛」の原稿を『八犬伝』に使用したのである。

この一事について、これまでさまざま批評がされてきた。中川竹洞は『八犬伝』に「二十村の闘牛」を使用したことを「剽窃」であるとし、『ライバル日本史』(「越後の文人、江戸に挑む鈴木牧之の滝沢馬琴」一九九五)では、「馬琴が雪の本の執筆を引き受けて十二年、『南総里見八犬伝』のこのくだり(論者注序章六頁に挙げた第七輯巻の七の巻末の記)は、馬琴が牧之に対して繰り返しきた執筆遅延の言い訳そのものであった。」とされている。また、磯部定治著『鈴木牧之の生涯』(野島出版、一九九七)でも、

牧之が馬琴に送った牛の角突き資料は、馬琴の『玄

同放言』の動物の場へ加えられる予定であった。しかし、実際に使用されたのは、それから七年後の文政十年だった。『南総里見八犬伝』の第七輯の「古志郡二十村闘牛の図」として使われ、「北越鈴木牧之原図」とされている。この八犬伝の中で、『雪譜』の出版が遅れていることを言い訳がましく書いており、角突きは牧之の取材によるものであることを述べている。

(四七頁)

とされている。馬琴は十数年間牧之を待たせた挙げ句、結局出版することができなかったのであるが、そのことも災いし、馬琴が「二十村の闘牛」を『八犬伝』に使用したことをよくとられていない。

だが、馬琴が「二十村の闘牛」を「剽窃」したなどということは全くの言いがかりである。この「二十村の闘牛」の件について、鈴木牧之研究の第一人者である高橋衷氏は、その御著『北越雪譜の思想』(越書房 一九八一)の中で、「馬琴の真意は、決して牧之をあざむいたり、資料を盗むといったものではなからう」と述べられ、次にあげる書簡を引用されている。

牛角突之図八八犬伝七編二加入いたし候間、当三四月

頃二は出版可致候。尤貴兄之事くハしく書入置申候。
乍去雪譜出版に相成候ハバ角突もひかへておけハよか
つたにと存候間、少々後悔の風味に御座候。御一笑可
下候。(文政十一年正月三日付)

さらに、この書簡を引用された上で、次のようにも述べられて
いる。

馬琴は、軽い気持ちで「越後雪譜」の前宣伝もかねて
『八犬伝』にこの牛の角突を紹介したものと見える。
この書簡によれば、『八犬伝』へ載せたのに、牧之へ
の相談もなかつた。牧之も、この図の載つた『八犬伝』
七輯の出版を心まちにしていたのか、文政十一年十一
月四日、十一月二十八日の「馬琴日記」に、出版の問
い合せをしている。「越後雪譜」も『八犬伝』も、す
べて「著作堂主人著」なのであつてみれば、牧之の資
料をどこに使おうとも、後世の人達が考えるほど重大
なことではなかつたのであろう。

ここで高橋氏は「この書簡によれば、『八犬伝』へ載せた
のに、牧之への相談もなかつた」と述べられているが、先
に挙げた書簡の文面から判断すると、文政十一年以前に何

らかの相談をしていたと思われる。だが、高橋氏が述べら
れるように、牧之は雪譜著者を馬琴とすることを認めてお
り、馬琴が資料をどう使おうと自由であつた。また、先に
挙げた、「二十村の鬪牛」を『八犬伝』に使用したこと
についての、馬琴の主張を見てもわかるように、決して自ら
の名を高めるために行つた「剽窃」などではないのである。

このような批判が生じる背景には、馬琴の傲慢といわれ
ている性格が関係していると思われる。温厚篤実で、馬琴
に忠実に資料を送つていた牧之と、結局雪譜を出版できな
かつた馬琴の傲慢な部分が比較され平等な目で見られては
いない。また、「二十村の鬪牛」の『八犬伝』への使用の
され方について、具体的に分析されていない。そこで、本
論では、『八犬伝』において、「二十村の鬪牛」がどのよ
うに使用されていたか具体的に考究することによつて、そ
の真実を明らかにしていくことにする。

一 『八犬伝』の構想と「二十村の鬪牛」

(一) 「二十村の鬪牛」と『玄同放言』

実際に『南総里見八犬伝』に「二十村鬪牛の図」が載せ
られたのは、越後の場面にはいる前、第七輯巻の五の巻頭、

驚にさらわれて行方知らずとなつていた浜路姫と信乃が邂逅する甲斐國の場面が描かれている巻である。そこでは「八犬伝第七輯巻之五に附記す闘牛考并に小狗の略説」として、中国の文献を引きながら、闘牛と小狗についての考証を記している。その中で牧之の名と共に越後「二十村の闘牛」が紹介され、漢齋によつて書き直された「二十村闘牛の図」が使われているのである。その文章は次のようなものである。

闘牛は、本邦にも、むかしより、越後州古志郡、二十村に在り。人多くこれを知ざるのみ。吾友鈴木牧之は、越後魚沼郡、塩沢の里長なり。いぬる庚辰年春三月二十五日、予が為にその地に赴きて、闘牛を觀て、手づから図説を為りておこしたり。牧之云、二十村は地方の惣名なり。闘牛の地所は、定りたることなし。毎歲三四月の間、雪の消果るに及びて、寅申の兩日の、吉辰をえらみてこの事あり、土人は、牛の角突と唱ふ。原是件の村々の城隍なる、十二権現の祭祀によりて、この戲を興行す、といへり。この闘牛の光景は、本輯第七の巻に載たれば、こゝに具にせず。左の図と合し見るべし。原図は牧之の筆するもの、紙中甚闊して、且二三頁あり。それを縮図して漏さず、哀めて櫛

帚一ト頁の中に尽せしは、画者漢齋の筆力に成れり。上古には、陸奥はさらなり、越後近江さへ夷俗に擬せられて、夷長を置せ給ひしよし、國史に見えたれば、この闘牛の戲は、いとふりたる風俗の、波及にこそあるならめ、昇平既に久しうして、辺鄙も文物に乏しからねば、今は東奥・北越の尽処までも、夷めきたる事はなきに、此闘牛の戲の、偶越後に遺りしは、古俗を知るの端崖ならずや。尙崔安潛をして世に在しめば、神遊して見まく欲するなるべし（崔安潛ハ好メリレ看ルコトヲ「闘牛」見ヘタリ「五雜俎人ノ部ノ三二」）。

このように馬琴は「手づから図説を為りておこしたり」「牧之云」と牧之の名を出し、牧之が見物に行つた期日まで記し、牧之が取材したことであることを明記している。また、ここに載せられた「二十村闘牛」の図は、当時挿し絵を担当していた漢齋が書き直したものであったが、そのことについても「原図は牧之の筆するもの」著している。その上で馬琴は自らの考証を入れながら「二十村の闘牛」についての説明を引用しているのである。

ところで、磯部氏も述べていたように、「二十村の闘牛」は初めから「八犬伝」に使用される予定ではなかった。牧之宛馬琴書簡文政元年五月十七日では馬琴は、「牛合の事

は別しておもしろく覚申候。是は図あらたに作り画せ候つ
もりに御座候」(『鈴木牧之資料集』新潟県教育委員会編、
一九九〇、復刻版)と言ひ、「鬮牛は幸ひ牛の考有之、こ
の内へ取加へ申候」(同書)と自著『玄同放言』に載せる
ことを約束している。このように、牧之と本格的に交渉を
始めた文政元年当初、馬琴は「二十村の鬮牛」を雪譜に載
せる前に、まず『玄同放言』で紹介しようという条件で、
牧之に資料を求めたのである。少なくとも牧之と馬琴が雪
譜の出版について本格的な交渉を始めた文政元年の時点では、
『八犬伝』への使用を考えていなかったはずである。

しかし、『玄同放言』の中で「二十村の鬮牛」が紹介さ
れることはなかった。なぜなら『玄同放言』は全巻刊行さ
れなかつたからである。馬琴は『玄同放言』を中途で終わ
らせることになつた事情について馬琴は文政五年閏一月一
日付けの殿村篠齋への書簡のなかで次のように言っている。

拙著放言三集廻事御尋披下、御書中之趣、承知候。
かねても一寸申上候歟、右随筆ものはとかく大ばね
折レ、そのくせ書肆も利の為に八さまで歡び不申候。
しかれども、書候て遣し候ハゞ、ほり立可申候へ共、
何分随筆にとりかゝり候ては腹合甚むづかしくなり、
戯作ハ一筆も出来不申候。さて、右随筆にそのとし

をくらし候てハ、甚不經濟に御座候。且又、引書二
ほしき書籍買ひ入レ候事も多く、彼是に損ありて益
すけなく候へバ、本本意ながら兩三年休ミ候て、八
犬伝・巡島記之兩編不殘あらハし終り、机上の手透
になり候節、ゆるく放言の三編にとりかゝり可申候
ト奉存候。夫迄命だに恙なく候ハゞ、著し置候目錄
不殘全部いださせ候はんと存候。その間、いろく
考候事も多く、とし久しく貯置候てハ後悔も少く候
間、これハ出版ハ急ギ不申候(『天理図書館善本叢
書 馬琴書翰集』天理図書館善本叢書部編集
委員会編、八木書店、一九八〇)

このように馬琴は、「書肆も利の為に八さまで歡び不申」
と書肆にとつて儲からない書であることを述べ、「戯作ハ
一筆も出来不申候」「甚不經濟に御座候」と読本の執筆が
滞っていることと經濟的な利益がないことを理由に『玄同
放言』出版を一時断念した。また、この後に「放言の噂ハ
いたすもの稀々に御座候」と言っていることから、多くの
読者を得ることができなかつたことも断念した理由であつ
たと思われる。この『玄同放言』の続集出版断念と共に、
牧之が苦勞して取材した「二十村の鬮牛」も無駄になつて
しまつたのである。勿論「二十村の鬮牛」は雪譜に載せる

はずの資料であったのだが、『玄同放言』に載せられれば、雪譜の原稿の一つが出来上がるはずであった。しかし、『玄同放言』が未完で終わってしまったことによつて、「二十村の闘牛」の資料は手付かずのままであつたと思われる。

(二) 『南総里見八犬伝』の構想と二十村闘牛

では、『玄同放言』の出版断念後、馬琴はどの段階で「二十村の闘牛」を『八犬伝』の構想の中に取り入れることにしたのであるうか。日記や書簡の中に『八犬伝』に「二十村の闘牛」が載せられることとなつた事情について記されている最初のもは文政十一年正月三日付の書簡であり、そこには「牛角突之図八八犬伝七編二加入いたし候間、当三四月頃二は出版可致候」と記されている。だが、その構想が、この書簡が書かれた以前の、いつごろ考えられたものなのかははっきりしない。そこで、馬琴は『八犬伝』の構想をどのように考えていたのかを明らかにし、「二十村の闘牛」を使用した意図を追つていきたいと思う。

今日『八犬伝』の構想について、石川秀巳氏が「『南総里見八犬伝』ノート」という共通の副題⁽¹⁾を付けて研究されており、発表された論文の中で詳しく述べられている。ここでは、その石川氏の研究を元に考察していくこと

とする。

石川氏によれば、馬琴が『八犬伝』を書き始めた当初は「物語の大枠に関わる〈初期全体構想〉があり、その中に起筆時の具体的な計画である〈初期部分構想〉」⁽²⁾があつたとされている。「初期全体構想」について石川氏は「『八犬伝』は発端部と列伝部の二部構想として構想された」⁽³⁾とされている。ここで発端部とは「里見義実の安房統一過程における玉梓の怨恨の発生から、その発現としての伏姫の富山入山」と「八犬士出生の直接の原因となる伏姫の自害までを語る」⁽⁴⁾までである。この発端部で設定された「八犬士出生の因と八犬具足の予告を受けてその実現を語るのが列伝部」⁽⁵⁾である。

また、「初期部分構想」とは義実による安房統一から「信乃による犬士吸引の物語」⁽⁶⁾によつて信乃、莊介、現八、道節、小文吾の五犬士が結集されるまでとされ、それは、第一輯から第四輯までとされている。発端部で「伏姫物語を通して敷設した『因果の理法』」⁽⁷⁾が、犬士たちを誘い、信乃を中心として犬士たちが登場し、そして、古那屋で集合した信乃、現八、小文吾、親兵衛の四犬士は、そこで邂逅した、大、蟹崎照文によつて、犬士たちが持つ運命を開示される。この信乃伝による「運命開示の過程」⁽⁸⁾までが、「初期部分構想」である。また、第四輯までが

「初期部分構想」であったことについて、次の友人殿村篠齋に宛た文政五年閏一月一日付書簡も挙げて述べられている。

右五輯三冊め迄者、信乃・額藏等がなごりの一議二御座候。四・五・六と三冊八道節がなごりの一段にて、就中、五・六武冊八大場也。甚書きとりがたく、こたつく場にて、大骨を折り申候。其内、あたらしき趣向も御座候。出板の節、とくと御塾覧之上、御高評被成下候奉仰候。よほど再遍御考無之候へバ、作者ノ用心御見おとしあるべく歎と存候ほどの事也。そこらハ、はやく御目にかけてたく存候。四編までに大ていしくし候処、又あたらしみヲ得候事、一朝の苦心にあらず君ならでハよく御見届被下候仁、稀なるべしと奉存候。
(前出『天理図書館善本叢書 馬琴書翰集』より)

石川氏はこの書簡を提示して次のように述べられている。

「四編までに大ていしくし」とは、単に初期構想が尽きたことを言うにとどまらず、四輯における「因果の結局」によつて構想の円環が閉じられたことを意味するのではないか。(「八犬士列伝の構想」『南総里

見八犬伝』ノート(三) (三〇三頁)

このように「初期部分構想」として馬琴が考えていた趣向は第四輯までに書かれ、その後馬琴は「あたらしみ」を構想したのであった。加えて石川氏は「あたらしみ」について次のように述べられている。

「あたらしみ」とは、信乃伝が小構想を閉じたあとをうけ、荒芽山を始点とし親兵衛伝で括られる新たな構想枠を意味した。信乃伝が発端部と呼応しつつ八犬士の運命の存在を物語の表面に浮上させ定着させる過程であったのに対して、ここで語り継ごうとするのは、新たな始点と終点とを与えられて、まだ登場しない二犬士を登場させ八犬具足へと導いていく犬士列伝である。(「八犬士列伝の新構想」『南総里見八犬伝』ノート) (六六頁)

四犬士が行徳に集結し、その後、まだ幼なかつた親兵衛を除く三犬士たちは囚われの身となつた莊介を救出に大塚へ戻る。そこで、登場した姨雪世四郎、その息子力二・尺八という人物設定を始め、第五輯以降の構想が、馬琴を苦心させた「あたらしみ」である。そして、「八犬具足へと導

いていく犬士列伝」の中に小文吾が登場する越後の場面も含まれるのである。

以上のように、「初期構想」としては、第四輯までではなく、馬琴は執筆において「大でいつくし」、「あたらしき趣向」を求めていた。「〈初期構想〉に従って執筆する中で次の〈部分構想〉も具体化」⁽⁹⁾するはずであったが、そのために、「一朝の苦心」では足りないほど困っていたのである。馬琴は「あたらしみ」を考える中で、牧之資料をもとに「二十村の鬪牛」を取り入れることを思いついたのではないか。

さらに、先に述べたように第四輯を出した文政三年から五年の間は、牧之から送られてきた資料として鬪牛も紹介されるはずであった『玄同放言』続集執筆を断念した頃である。牧之が苦勞して取材してきたにもかかわらず、「二十村の鬪牛」を人々に紹介できないことに對し馬琴は済まなく思い、それなりの自責の念を抱いていたかもしれない。ちょうどその時、先に挙げた馬琴が「あたらしみ」に苦心しているともらした書簡が文政六年に書かれたのである。思いきつて「二十村の鬪牛」を『八犬伝』の新たなストーリーに取り入れるによつて、牧之の熱意に答えることができ、二つの悩みを解決できると馬琴は考え付いたのではないだろうか。確かに、馬琴は「あたらしみ」のために「二

十村の鬪牛」を利用した。だが、それと同時に苦心の末送ってきた牧之の「企望¹⁰を空しくせじ」という思いもあった。『八犬伝』と「越後雪譜」その二つの作品のために「二十村の鬪牛」は使用されたのであり、一石二鳥を狙った馬琴の苦心のアイデアであったのである。

これらのことから、『八犬伝』への「二十村の鬪牛」の使用を考えついたのは、『玄同放言』第三集以降の出版を断念した後であり、「あたらしみ」の構想に苦心していた文政五、六年頃、「二十村の鬪牛」も含めて越後の場面を『八犬伝』に取り入れようと考えついたらと推測される。そして、「二十村の鬪牛」を『八犬伝』に取り入れたことによつて馬琴は行き詰まりを打開することができたのである。

二 小文吾の列伝と「二十村の鬪牛」

(一) 「あたらしみ」の構想における八犬士の列伝

以上のように馬琴が執筆開始時に立てた「初期部分構想」は『南総里見八犬伝』第四輯までであり、その後の構想を考えるなかで、「二十村の鬪牛」が使用されたのであった。ここで第四輯以後の構想について石川氏は次のように述べられている。

信乃伝の中に狂介・道節の要素を未解決のまま残すことにより、後続部分への展開の糸口としたのではなかったか。第五輯は、構成上、語り残された狂介・道節の物語に一応の決着を与える信乃伝の補遺Ⅱ「なごり」である。同時に、与四郎一家の物語を新たに導入することで新構想への展開を計る部分なのである。（『読本研究』第九輯「『南総里見八犬伝』構想論への視座」）

先に挙げた書筒の中で馬琴が「五輯三冊め迄者、信乃・額蔵等がなごりの一議二御座候。四・五・六と三冊八道節がなごりの一段」と言っていたように、第五輯の荒芽山の五犬士邂逅の場面までは第四輯までの信乃伝をまとめるための補遺であり、五犬士の離散後から、新たな展開が始まるとしている。

それは、荒芽山での離散の後に、毛野が登場する「対牛楼の抑留譚及び毛野の仇討ち」「庚申山怪猫退治」「甲斐指月院邂逅」そして、「越後山賊退治譚」などの犬士たちの流離と邂逅の列伝が三系統に分けて描かれている。これらの「八犬伝」の列伝部は、それぞれ何らかの作品を換骨奪胎して書かれたものであることが分かっている。まず、毛野が初登場する「小文吾抑留譚」については、『水滸伝』「張都監血鴛鴦楼に濺ぐ」。次に「庚申山怪猫譚」におい

ては、当時の絵草紙、『繁野話』巻三の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」、『かくやいかにの記』、『西遊記』、『赤岩庚申山記』、『松本楽山の紀行』等を典拠としていた。「甲斐指月院邂逅」においては、『日本靈異記』上巻の第九「嬰子の鷲に擒はれて他の国にして父に逢ふこと得し縁」、またはその他殺生に対する悪報譚が取り込まれている。そして、「越後山賊退治譚」は牧之の「二十村の鬪牛」がプロローグとして使用されている。

（二）越後の場面と牧之資料

ところが、越後の場面には「二十村の鬪牛」の他にも牧之の資料を元に描かれたと思われる部分がある。まず、小文吾の鬪牛見物が終った後、小文吾が世話になっている石亀屋地団太の舎弟鮫守磯九郎が、雪の穴の中で待ち伏せしていた船虫に襲われる場面がある。そこには磯九郎が推量したこととして、次のような説明的な文章が挿入されている。

彼此と看回らすに、声は正しく樹下なる、残雪の辺にて、その人土中にあるかとおぼしく、形状はなほも見えざりけり。越に熟尋思を做すに、こは北国の習

俗にて、冬春雪の深かる此、竈戸們が雪を穿て、竈藏の如くにしつ、その雪竈に躲居て、鳥を捉ること毎にあり。今は四月の初旬にて、里なる雪は消果たれども、日光に疎き巨樹の下、藪陰などにはなほ雪の、小山のごとく残れるあり。

この場面の描写は実際に刊行された『北越雪譜』「鷹の代見立」を元に描かれたと思われる。それは次のような文章である。

糞に土をかけたるを見れば其辺りの矢頃よき処へ、人の入るべき程に柄をふせたるやうなるものを雪にて作り、後に入り口をつけ内は洞になし、雁のをるべき方に穴をつくりてそのきたるをまつ。(中略)雁を見ればかの穴より焼炮の銃口をいたしてうつ也。かくするを里言にゆきんだうといふ、雪ン堂也。(岩波文庫『北越雪譜』岡田武松校訂、一九九七、第五一刷より)

『八犬伝』には、「鳥を捉ること」とし、雁という具体的な名前は記されていない。だが馬琴がいた江戸ではこのよな猟ができるほど雪がそれほど多く降らないことも考え、この場面は、牧之から送られてきた資料を参考にして

書かれたものと見て間違いないだろう。

さらに、この場面では船虫の亭主役として「童子篋子酒顛二」という盗賊が登場する。これは牧之の資料にあった越後の酒顛童子伝説によつていのである。酒顛童子の話は『玄同放言』にも載せられるはずであつたし、また出版された『北越雪譜』にも簡単ではあるが、「三歳の小児も知れる酒顛童子は蒲原郡沙子塚村の産、今猶屋敷跡あり」として紹介されている。

馬琴にとつて「二十村の鬪牛」とともに酒顛童子も興味ある話であつたのだらうか。この酒顛童子の件について馬琴は文政元年十一月八日の書簡で次のように言つている。

酒顛童子并に弥彦弥三郎老婆が事、御函説一覽仕候。右両件は増補越後名寄にて、かねてより粗承知仕候。さて酒顛童子の小説に付、愚考有之候へば、玄同放言人ノ部の下へ、著し可申と存、則惣目録へ載置申候。これは来卯冬出板の中に御座候。もし来春御遊覧も被成候はば、くはしく御糺被下度奉希候。依之越後名寄少々抄録いたし入御覧申候。(前出『鈴木牧之資料集』)

だが、馬琴は牧之と交渉を始める以前から越後の酒顛童子伝説については知つていた。それは、丸山元純の『越後名

「奇」を見ていたからである。「名詮自性」とは、『八犬伝』中で頻繁に言われるところであるが、鬼である酒頭童子の名を盗賊の親分の名として、意図的に利用しているのである。

さらに越後の場面で犬田小文吾が暴れ牛を倒すという設定については牧之の資料だけではなく、他の書も参考にしていたようである。それは、牧之と同じく越後の作家である橘崑論が書いた『北越奇談』巻之六其五に「谷根村の行光寺といへるハ怪力の名ありて生涯其力の極る所をしらず」と越後の力士を紹介している箇所にかような描写が見られるからである。

此時行光寺つかく近付寄り、兩牛の角を左右の手にしつかと握りエイヤと声を出して押分れば、さすがの猛牛片手の怪力にたぢくと尻込する所を、大勢集り長木などを入て角を結び付、漸々に引分たりしが、(本文は『新潟県史』別編3人物編(一二八頁)によつた。)

馬琴は牧之と交渉を始める前から『北越奇談』の存在を知っていたのであるが、馬琴は牧之提供の資料である「二村の闘牛」と、『北越奇談』に紹介されている力士を小

文吾の列伝に取り入れたのである。

以上述べてきたように、七犬士の「義勇」を説く列伝部は様々な典拠を元に作り上げられた世界であり、馬琴は「あたらしみ」を創作するために、積極的に他の資料を利用したようである。このことから『八犬伝』において、馬琴が独自に創作したのではなく他の文献や資料を典拠として物語を作っているのは、越後の場面だけではないことが分かる。そもそも、『八犬伝』そのものが『水滸伝』『神記』等を元に作られているのであり、また、「稗史小説」が史実や古文獻の換骨奪胎された作品という性質であることを考えれば、これは当然のことである。ただ、馬琴は作品中で他の文献を参考にした際、物語中ではその文献の名を出さないが、馬琴が非難される所以となっている各所に挿入された随筆部分ではいちいち明記しているのである。それは、先に挙げた庚申山の記述を見ても分かるであろう。ところで、山本和明氏は「京伝と牧之」(『相愛国文』第七号、相愛女子短期大学国文学研究室編、一九九四)の中で考証随筆について「京伝はだれの蔵書を利用したか、だれの説であるかに固執している」が、「読本ジャンルにおいては資料提供者の名前などは記述されていない」と述べられている。この論を馬琴に置き換えてみると、馬琴も『八犬伝』を執筆するにあたってこの立場に立っていたと

いえるであろう。しかも、馬琴は「読本」の中でも小説である場合と考証随筆である場合とで、その在り方を區別しているのである。越後の場面を書くにあたつても馬琴はこの姿勢を守り、考証部分の第七輯卷の五巻頭では、牧之の名やその他の文献を明示し、小文吾の列伝が書かれた地の文では『水滸伝』『北越奇談』というように、敢えて典拠を記すことはしなかつたのである。

(三) 小文吾の列伝における闘牛の意味

こうして小文吾の列伝を他の列伝部を並べて見ると、そこに相違点があることに気付く。それは、他の犬士が何らかの靈異、怪異な出来事と遭遇しているなかで、小文吾だけは、現実的な世界のなかで生きているのである。他の犬士たちの列伝では、化け猫退治や、信乃の許嫁であつた浜路が幽霊となつて登場するというように、それぞれなんらかの怪異譚が描かれている。しかし、小文吾の場合は、「対牛樓抑留譚」「越後盜賊退治譚」を通してそのような怪異譚は見られない。幻想の世界ではなく現実的な世界に小文吾は存在していると言える。魑魅魍魎の世界ではなく、より現実的な世界で生きた小文吾の列伝において当時も実際に行われていた「二十村の闘牛」は小文吾を活かすため

の好材料であつたのではないか。

越後の場面以外の場面は、他の文献の引用や模倣により、現実的ではない、空想的な世界が描かれていた。それは、江戸の読者にとつては、興味をひかれるものであつたものの、身近なものとはなりえなかつたであろう。そこで当時、実際に行われていた越後「二十村の闘牛」を使用することによつて、読者にとつて『八犬伝』の世界をより身近なりアルなものにしようとしたのではなからうか。闘牛の図を事前に紹介し、その上で越後の場面に展開していくことによつて、読者は『八犬伝』の世界をより現実的なものとして捉え、よりその世界に心酔することができる。「二十村の闘牛」は現実的な世界を生きている小文吾の列伝にとつて、大切な役割を果たしているのである。

また『八犬伝』第九輯卷之三十六簡端附言には次のような注目すべき馬琴の主張が書かれている。

稗史小説の功致たるや、よく情態を写し得て、異聞奇談、人意の表に出るに在り。

ここに馬琴が考える稗史小説観が明示しているのであるが、小文吾の列伝の一つに「二十村の闘牛」を使用した馬琴の意図はここにあるのではないか。

小文吾は、現実の世界に生きていると述べたが、それに加えて小文吾は「仁義八行の化け物」と言われている八犬士のなかでは、より人間らしく描かれていると私は見ている。なぜなら、小文吾の行動を追つていくと、彼の行動は他の犬士に比べて、彼の持つ玉の文字である「倂」という徳目に縛られていないからである。他の犬士の行動のなかには、あきらかにそれぞれの持つ徳目にそつた行動が見られるのであるが、小文吾の行動の中にはそれがはつきりとは見ることができない。言い替えれば小文吾を見ていても「倂」という徳目が何を意味しているのか見定めることができないのである。しかも、女装した毛野と結婚の約束をするエピソードがあるなど、おもしろみある人間らしさが残されているのである。それは、すなわち、小文吾の「情態を写し得」ということにならないであろうか。そのことによつて、人々は小文吾をとりまく「異聞奇談」に深く触れることができ、その中の一つ「二十村の鬪牛」も印象深いものになるであろうと馬琴は考えたのではなからうか。小文吾を活かすために、「二十村の鬪牛」が必要であり、逆に小文吾の列伝の一つとして越後の「異聞奇談」を描くことによつて、越後の鬪牛が強調されるのである。このことから、馬琴は牧之から送られてきた資料を軽く扱つたのではなく、自身の稗史小説観に基づいて的確に『八犬伝』

に使用したといえる。それに、小文吾は、相撲に通じており、力が強く、犬田という盗賊を倒して、その名が付けられたという設定である。その強力の彼が登場し、活躍する場面として、牛の相撲である越後の鬪牛はうつつけである。小文吾を活躍させ、そのことによつて越後の習俗も強調され、人々の目を引き付けることを馬琴は考えていたといえよう。そして、「二十村の鬪牛」が『八犬伝』の中で活かされることができたのは、他でもない牧之が苦心して現地を取材した結果であり、牧之の資料のおかげで、よりリアルな世界を描くことができたのである。

(四) 悪女船虫と「二十村の鬪牛」

ところで、越後の場面には船虫という悪女が登場する。船虫について、石川氏は「馬琴が船虫の『悪』を最大級のものとして設定した」⁽¹⁰⁾ものであり、荒茅山以降の列伝部「対牛樓小文吾抑留譚」「庚申山怪猫退治譚」「越後山賊退治譚」で、犬士たちを苦しめ、そして豊嶋、司馬浜で犬士によつて、誅戮された船虫を、「三系列を連結させ一本により合わせるための悪として列伝部に導入されたと考えられる」⁽¹¹⁾とされている。船虫は犬士列伝の中で四度登場し、いづれも盗賊や、化け猫の妻として、犬士たち

に災難をもたらす悪として描かれている。勧善懲悪が貫かれる『八犬伝』の中で、船虫は「善」に対抗する「悪」として、ひとときわ際立っており、逆にいえば、船虫のような「悪」がいるからこそ、八犬士たちの「善」の姿が強調されるのである。

その船虫と七犬士のなかで最も関係の深い人物といえ、小文吾である。船虫が初めて登場したのは、第六巻の一で、小文吾が対牛楼に抑留するきっかけとなった段であった。越後でも小文吾は船虫に命を狙われ、そして、第八巻の八における船虫最後の場面においては、小文吾は十字街妓に身をやつしていた船虫を捕え、誅戮している。ここで、船虫はどんな最期をとげたのか。それは、小文吾、信乃らに捕えられ、その時の夫であった媼内が盗んできた牛の角によって突き殺されるという衝撃的な殺され方である。馬琴はこの構想について、第九輯中帙附言で次のように言っている。

本伝第九十回に、船虫・媼内が、牛の角をもて戮せらるゝは、第七十四回、北越二十村ならる、鬪牛の照対なり。

照対（照応）とは馬琴の稗史七法則の内の一つで「彼と此

と相照らして、趣向に對を取るをいふ。（中略）又照対は、故意前の趣向に對を取て、彼と此とを照らすなり」ということである。このように、船虫は越後での牛を巡る事件の照対として牛の角により、物語から消えていくのである。

この船虫の存在は第五輯以降の「あたらしみ」を構想した段階で設定されていた。石川氏も「船虫が（小文吾抑留譚）（怪猫退治譚）と二話連続で登場することは第六輯以降ですでに予定されていたと考えざるを得ない」と述べられている。船虫と同じく、『八犬伝』第五輯以降の「あたらしみ」を考える中で設定された「二十村の鬪牛」も、やはり八犬士列伝の一つを飾るために使用された。先の馬琴の「照対」の例に見えるのように船虫と「二十村の鬪牛」とは深い関係があるのである。

以上のようにも、し、「越後鬪牛譚」がなかつたら、小文吾の列伝の一つがなくなり、犬士たちの列伝をつなぐ役割をしていた船虫も生きてこない。また、牛によって突き殺されるという悪行を働いた船虫に對する報いを描くことにより、絶対的な悪の否定を強調することもできなかったであろう。船虫の悲惨な最期を演出することによって悪を全面的に否定し、善の象徴である七犬士の具足に連結していく。小文吾の列伝、そして他の犬士の列伝部をつなぐ役割をしていた船虫の最期をより効果的に印象付けるためにも

「二十村の鬪牛」は重要な役割を担っていたのである。

終章

以上のように越後鬪牛の奇事は、『八犬伝』の中で重要な役目を負っていた。馬琴は「二十村の鬪牛」によって『八犬伝』の世界が広がったことを非常にありがたく思い、牧之のことを大事に考えていた。そのことを表す文章が第八輯巻一の本文中に見える。それは次のような記である。

小千谷の郷むら「小千谷を前回に刈羽ノ郡こちやと傍訓たづねたるは非なり。小千谷は魚沼郡に属して、をちやと唱ふ。又小栗村も土とち呼よこくりむらなるよし、越後塩沢なる牧之がいへり。看官宜く訂すべし」

ここで、馬琴は小千谷の地名を「こちや」とルビをふつてしまったと訂正している。しかし、この「小千谷」の読み方について馬琴は知っていたはずである。なぜなら、二人の交渉が始まった文政元年五月十七日の書簡に「去ながら「をちやを、「こちやとおほえちがひ、板下には「こちやとかなつつけおき申候。(『鈴木牧之資料集』一三九頁)」と小千谷の読み方について馬琴は聞いているからである。

ここで注目すべきことは、先の注で「越後塩沢なる牧之がいへり」と断わっているということである。訂正をするだけならわざわざ牧之の名を出すまでもない。これは、馬琴自身でも知らない越後の地名を、牧之は知っている、ということの人々に知らせたかったのではないだろうか。それで、馬琴はルビの誤りについて、その間違いの訂正をしたのは、他でもない越後の鈴木牧之である。と強調するために書き入れたのである。さりげない記述ではあるが、馬琴は自分のミスをうまく利用し、読者に牧之の名を知らしめようと計ったのであろう。

また、牧之の方でも大作家馬琴の小説『八犬伝』に自分の名と自ら取材に行き書き記した「二十村の鬪牛」が紹介されることを喜んでいたのである。二人はお互いに感謝し合い、「二十村の鬪牛」が載ったことについて何ら確執があったわけではなかった。その証拠に牧之が「二十村の鬪牛」について非難している書簡等は見当たらない。それどころか『八犬伝』第七輯出版後に書かれた書簡には次のような記が見られる。

此図八犬伝流行之始、曲亭馬琴に頼まれたれ、桃花之此態々見物、其小千谷西脇二三四日降りつゝける空敷逗留。其翌日より上天氣、道行も何も大田小文吾ヨツ

り候より此本大当り、百冊で満尾。此本二も拙名あり、読本戯作二而八珍敷事二候。馬琴も老病拙と同じ。是八兩眼夜々五更迄明候。当齡七十五、四十八九年之交り。今如骨肉。筆一本の渡世今日を漸々暮し候。其上伴宗伯若死、十二三歳の孫にかゝりはんものもの如書御免可被下候。

(新潟県小出町 松原啓作氏藏「八犬伝」鬪牛の図下
絵裏書) (『北越雪譜の思想』百三二頁)

また、この記の後に、牧之は「此図三四まへ交りて罷在、此一枚雪譜之板本二相成候、大流行」とも記している。牧之は馬琴が自らの著作の中に取り入れることを不満に思っていたわけではなく、むしろ、歓迎していたようである。

また、二人の確執がなかったことは、交際が晩年まで続いていたことから分かるであろう。京山に雪譜出版を委ねてからも、牧之の方はそれまでと変わらず、馬琴に年始の挨拶や土地の産物などを送っているのである。また、馬琴の方はというと、当初はやはり腹を立てていたであろう。だが、それは牧之にというよりも、自分より格下の京山に依頼したことに對して腹を立てていたと思われる。『北越雪譜』を出版するにあたり、京山は馬琴に序を書いて欲しいと頼んだのが、馬琴はそれを断わった。それも、牧之に

腹を立てていたわけではなく、京山との確執があったためであろう。馬琴にとつては京山のことだけが癪にさわることで、それ以外は牧之のことをかけがいのない友人として見ていた。

それは、馬琴は自分の生涯を書き記した『後の為乃記』のうちの一冊を牧之に送っていることから分かる。木村三四吾著作集Ⅱ『滝沢馬琴一人と書翰』(木村三四吾著、八木書店、一九九八)の中で現存している『後の為乃記』のうちの国会図書館蔵鈴木牧之本について次のように述べられている。

国会本上冊別紙三十五丁馬琴の自筆の末三行は、

琴嶺うしをいたミて、かぞのおきなによみてた
てまつるしたふらむなき面影をふづくゑに向ふ
硯の水かゞみにもこの余もなほあらむを、とし
ころの知音ならぬは省きつ。

(中略) 琴嶺の死を、そのとき馬琴は牧之に伝えることを多分しなかつたはずである。それを、越後の牧之は後に伝聞して知った。そこで、早速何がしかの香料に添え、哀悼歌を馬琴に送つたものとみえる。その時期は明らかではないが、天保七年のやや早い頃だったのだろうか。そこで馬琴は、第一次稿に切り継、足し

紙を以て増補したのと全く同じ手法で家蔵の一本を入紙改変し、牧之の歌一首を加え、これに贈ったのである。

牧之は琴嶺（馬琴の長男）の死を聞き、馬琴の悲しみを知り、哀悼歌を送った。馬琴はその牧之の意に感謝し、家蔵にするつもりでとっておいた『後の為乃記』一冊をわざわざ手直しし牧之に贈答したのである。もし、二人がいがみ合っていたならば、このようなことはしなかつたであろう。

それに、馬琴は傲慢な性格であると言われているが、実は友人に対しては非常に情の厚い人物である。それは次の友人殿村篠齋宛の書簡（天保三年九月廿一日付）に明らかである。

それに又今日ハ一日著述を休筆にして此御返事を書候にて御察し可被成候利は得易く好友の信は得がたく候利を後にして信を先にせんと欲りし候故生涯不富その日くらし同様にておくり候貨殖の目よりは馬鹿ものといはれ候半なれとも持まへの偏愚はわれなからせんかたく候御一笑と奉存候（日本藝林叢書第九卷「曲亭馬琴書簡集拾遺」三村清三郎他編、六合館 一九二九）

このように、馬琴は「利を後にして信を先にせんと」言っているのであり、決して人付き合いを疎かにするような物ではなかつた。

馬琴は牧之のことを決して疎かに思つて、「軽い気持ち」で「二十村の鬪牛」を『八犬伝』に使用したわけではない。そして、越後の場面、また船虫のくだりは、牧之の資料なしでは、作られることがなく、また、『八犬伝』に牧之の資料が載せられたことによつて、後の『北越雪譜』の評判につながつた。「二十村の鬪牛」は、馬琴、牧之に多大な恩恵をもたらしたのであり、二人の希望を現実のものにするまたとない資料だつたのである。

【注】

(1) 『読本研究』第九輯「南総里見八犬伝」構想論への視座」（広島文教女子大学研究出版委員会編、

淡水社、一九九五）三〇二頁

(2) " 三〇四頁

(3) 「団円構想の転回―『南総里見八犬伝』ノート―」（『和洋女子大学紀要』文系編第31集、一九九二）

三十頁

(4) " 三十頁

(5) " 三一頁

(6) 「八犬士列伝の新構想―『南総里見八犬伝』ノ
ト」 (『和洋女子大学紀要』文系編第28集、

一九八八) 六三頁

(7) " 六三頁

(8) 『日本文芸論稿』第12・13合併号 (一九八三)
三八頁

(9) 前掲(2) 三〇四頁

(10) 前掲(6) 七五頁

(11) " 七六頁

(いがらし さだはる 長野清泉女学院高等学校教諭)